

2014 年度 冬鳥調査の報告

今年もアツと言う間に 5 月中旬になってしまいました。冬の間私たちを楽しませてくれたツグミやシロハラ、カシラダカも渡去し、代わって里山はキビタキたち夏鳥のさえずりで賑わっています。2013 年冬は、例年になくイスカの記録が多く、低地では冬鳥が少なかった冬でした。では、2014 年冬はどうだったのでしょうか。冬鳥ウォッチおよび冬鳥アンケートの調査結果からご報告いたします。

記録状況

14 年冬は、冬鳥ウォッチへは 27 名の方によって北海道から九州までの 60 か所から各種の記録件数の合計 124 件の情報が寄せられました。冬鳥アンケートへの回答は 46 名でした。冬鳥ウォッチは初年度の 2006 年を除くと調査地数は過去 8 年間で最低で、冬鳥アンケートも 2012 年は 130、2013 年は 90 で、かなり少ない回答数でした。

冬鳥ウォッチのデータを日本を大まかに 5 つの地域に分けて調査地の分布をみると、関東地方および甲信地方が 30 件と最も多く、全調査地の半数を占めていました。一方で、14 年冬も東北地方および北海道は 3 件と少なく、中部地方および近畿地方も少なく 5 件でした(図 1)。東北地方や北海道は気温も低く、積雪があることから森林などでの定期的な観察は難しいのかもしれませんが、それとも、対象種自体の生息数が少ないのでしょうか。

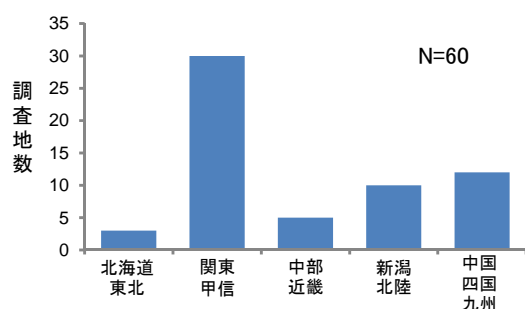


図 1. 大まかな地域別の調査地数の比較

各種の記録状況

14 年冬の記録種は、冬鳥ウォッチの対象種 6 種のうちイスカを除く 5 種が記録されました(図 2)。イスカは、バードリサーチが行なっている「さえずりの聞き取り調査」では、この春、志賀や富良野で頻繁に声が記録されていますし、Twitter やブログなどでもこの冬にイスカの話がアツ

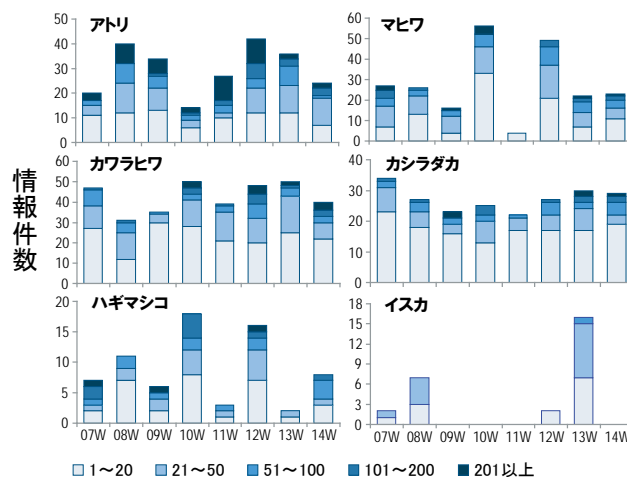


図 2. 2007 年冬以降の各種の情報件数と個体数ランクの経年比較

プされていまして、日本へ飛来していないわけではなく、観察者の目に留まらなかっただけの可能性があります。一方、13 年冬に記録件数が少なかったハギマシコは 8 件とやや増加しました。しかし、群れの大きさは小さい傾向があり、101~200 羽のランクは 1 件のみでした。

残り 4 種のうちマヒワ(23 件)とカシラダカ(29 件)は情報件数、個体数ランクともほぼ 13 年冬と同じでした。アトリ(24 件)とカワラヒワ(40 件)の情報件数は、14 年冬のほうが 13 年冬よりやや減少しました。ただ、カワラヒワでは個体数ランクの 101 羽以上のやや大きな群れは 13 年より多い傾向が見て取れます。アトリの個体数ランクに注目してみると、201 羽以上の大きな群れは 2 件と 13 年冬と同じでしたが、14 年冬では実際の個体数が 300 羽と 233 羽でした。13 年冬では、2,000 羽と 400 羽が記録されていることを考えると、14 年冬の記録個体数は少ないように思われます。ただし、14 年の秋口には中国地方で 10,000 羽や 5,000 羽の群れが記録されましたが、冬期には大きな群れは観察されなかったとのことでした。秋口に記録されたこれらの大きな群れはどこで越冬したので

しょうか。それとも各地に小群に分かれて越冬したのでしょうか。大きな群れの行方が大変気になります。なお、3月に北海道の南部でも6,000羽以上の群れが記録されていることが日本野鳥の会室蘭支部のホームページで紹介されています。したがって、14年冬のアトリは局地的に大きな群れが生息していたのかもしれませんが。

その他の鳥の状況

冬鳥アンケートで情報を収集したツグミ、シロハラ、ヒガラ、ヤマガラはいずれも平年並みかあるいは傾向がわからないような状況でした。キクイタダキは低地で少なく(図3)、ウソは中部地方では多かったようです(図4)。

一昨年は冬鳥が全般に多く、昨年は少なめという特徴があったのと比べると、今冬は特徴が薄く、それが原因で情報があまり寄せられなかったのかもしれませんが。全種の状況はこちらよりご覧ください

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/fuyudori/q2014.html

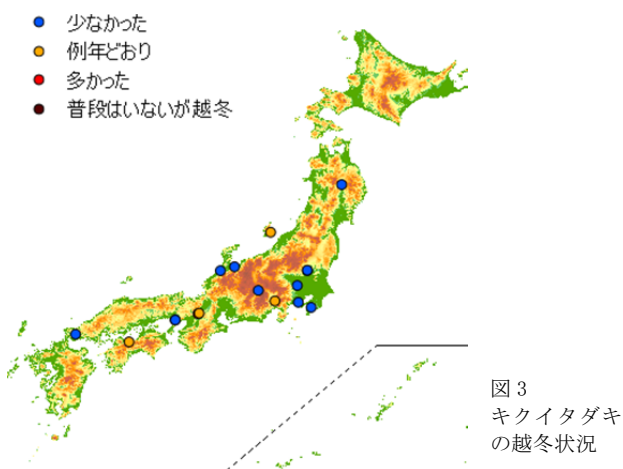


図3
キクイタダキの越冬状況

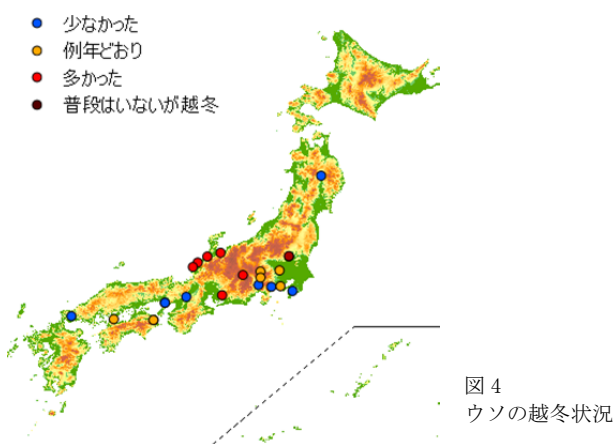


図4
ウソの越冬状況

冬鳥の年変動

冬鳥ウォッチのこれまでの結果から、冬鳥の飛来数は年によって変動すること、そしてその変動の傾向が種によって異なるらしいことがわかってきました(図2)。

アトリの情報件数は、2007年と2010年、2014年に少なく、その変動は徐々に増加しピークに達した後はまた徐々に減少しているようです。ところが、マヒワは、10年と12年に急激に増えた一方で11年はわずか4件と激減し、アトリのように周期的な変動はしていませんでした。また、アトリとマヒワの記録件数が多かった年は、両種で一致しないことも分かりました。年による記録件数の変動は、件数が少ないもののハギマシコやイスカでもみることができます。すなわち、ハギマシコの情報件数は1年おきに増減を繰り返す、イスカでは2007年や2012年のように多くなる前にその兆候が見られています。

ただし、調査地数が年によって異なりますので、調査地数で各種の情報件数を割った記録率で比較してみました(図5)。すると、アトリでは実際の情報件数の変動より明確ではありませんが、やはり周期的な変動をしているように見えます。一方でマヒワの記録率は情報件数と同じように急激な変動が見られ、ハギマシコとイスカの記録率は情報件数とほぼ一致していました。

また、アトリとマヒワは記録される群れの大きさも違いました。201羽以上の大きな群れの記録率は、8年間でアトリでは0.18(情報件数の合計232件、以下同じ)、マヒワではわずか0.04(224件)でした。しかも、アトリでは10,000羽以上の群れも記録され、ねぐらでは75万羽と言った巨大な数も報告されました。一方、マヒワは報告さ

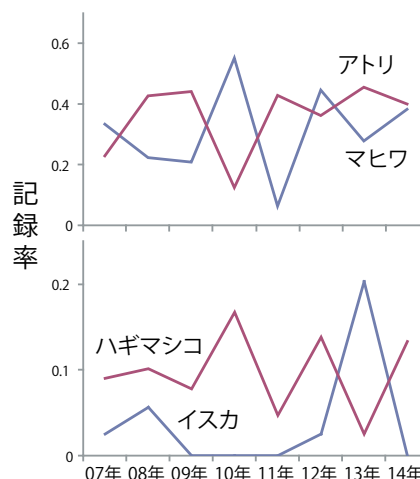


図5. アトリ、マヒワ、ハギマシコ、イスカの記録率の変動

れた最大の群れは 500 羽が最高でした。

このような両種における記録状況の変動の違いや群れの大きさの違いは、両種の食性などとも関係しているのかもしれませんが。アトリは繁殖期には昆虫類、特に蛾（シャクガ）の幼虫を摂食し、蛾の幼虫が多い年は繁殖成績が良いことが報告されています（Lindström 1987, Hogstad 2000）。一方、マヒワはトウヒやシラビソなどのマツ類などの樹木の種子を摂食しています。マツ類の種子の豊凶は、昆虫類の発生量より年によって急激に変動するのではないかと推測されます。そのため、マヒワの渡来数の変動が大きいのかもかもしれません。また、アトリの方がマヒワに比べて巨大な群れになるのは、アトリの冬の食性は木の実のほか農耕地のイネなどの穀類です。そのため、刈田が広がり大量の餌資源が得られる場所では数千羽以上の群れが形成されるのではないのでしょうか。本調査では、同様な環境に生息するカワラヒワも刈田で 1 千羽を超える群れが記録されています。

しかし、調査年数が 8 年とまだまだ短く情報件数も大変少ないため、ここで報告した記録率の変動の傾向が偶然に生じたのか周期的なのか、さらに調査を続けていく必要があります。

最後に

以上のように、14 年冬はあまり特徴の少ない冬だったようです。しかし、継続することで、冬鳥たちの記録状況がそれぞれの種で異なっていること、ハギマシコやアトリのように周期的に変動するらしいことが得られつつあります。さらにはっきりした変動の傾向を把握し、その要因を特定するには全国各地から多くの方の情報が不可欠です。その一方で、得られた変動が一部の地域だけで偶然起きたことなのか、日本への飛来数の変動によるのか

を明らかにするには、モニタリングサイト 1000 など他の調査と比較することも必要でしょう。また、木の実の豊凶など餌資源の調査も必要になると思われます。しかし、まずは、毎年多くの調査対象種の情報を集約することが大切です。そのためにも友人、知人の方々にもこの調査を紹介していただくと嬉しい限りです。今後ともご協力のほどよろしく願いいたします。15 年冬のアトリはさらに少ないのか、予想に反して逆に多くなるのか、ハギマシコは再び減ってしまうのか、今から楽しみです。

末尾ながら、14 年冬の調査にご協力いただきました皆様のご芳名を以下に記してお礼に替えさせていただきます。荒木廣治、石崎友紀子、石田健、石塚文信、井上賢三郎、今森達也、植田睦之、大出水幹男、大塚啓子、大塚祐二、大橋正明、川島賢治、衣川直美、木村有紀、桐生一樹、越川重治、小林俊子、齋藤映樹、坂部和久、佐々木務、鹿間信弘、清水敏弘、白石ひとみ、高橋邦年、田米希久代、多田英行、田中正晴、谷垣範昭、谷本洋子、富永敦、長嶋宏之、中島慶二、西教生、野中純、平野敏明、藤波不二雄、古川紀美子、宮本桂、村田愛子、築川堅治、山下晃司、湯浅芳彦、吉田敬喜、渡辺美郎の各氏。

引用文献

Hogstad, O. 2000. Fluctuation of a breeding population of Brambling *Fringilla montifringilla* during 33 years in a subalpine birch forest. *Ornis Fennica* 77: 97-103.

Lindström, A. 1987. Breeding nomadism and site tenacity in the Brambling *Fringilla montifringilla*. *Ornis Fennica* 64: 50-56.

(平野敏明/植田睦之)